

都市機能からみた交通問題とサステナビリティ

松本市地球温暖化防止市民ネットワーク、宮澤 信

canopus@go.tvm.ne.jp

はじめに

トラムを中心とした街づくりを行っているヨーロッパの事例を紹介し、松本市の状況に触れながら、都市機能と交通の関係を解き明かすとともに、サステナビリティ実現の課題に言及する。

1. ヨーロッパ視察報告

2014年、松本市の次世代交通の視察に参加した。10年前と古いが、交通は長期の取組みであるので紹介する。おもな都市はドイツのフライブルク、フランスのストラスブール、ナントなど、いずれも長野、松本とほぼ同規模の都市である。共通する重要なポイントを列記する。

- ・トラムに代表される公共交通を軸に、街の活性化を実現。
- ・トランジットを意識した路線網の構築。
- ・公共交通による、都市空間（都市機能）の回復：駐車場が公園や市場に生まれ変わるなど。
- ・弱者に配慮した超低床のトラムやバス：車いすの方が介助なしに乗降することができる設計であり、社会的包摂が強く意識されている。

2. 松本市の交通政策と現状

2015年に「松本市次世代交通政策実行計画」が策定されている。骨子は、以下の通りである。

- ・「車を優先した社会」の転換
- ・歩行者・自転車・公共交通の優先
- ・エコで快適な移動により人が集う「交通のまちづくり」
- ・路線バスの「公設民営化」：2023年4月～
- ・公営の「シェアサイクル事業」：2019年3月～ 中心市街地主体に拡大。現在37ステーション
- ・ゾーン30の拡大：小中学校周辺を主体に、現在8か所
- ・AI オンデマンドバス「のるーと」の実証実験：2023年10月～ 市内2地域で実証実験中

松本市の現状は、遅ればせながらも動き出した施策が以下の通りいくつかある。

一方で、理想（計画）と現実のギャップは拡大している。バス利用者の長期的な大幅な減少で、バス運行頻度は目標には程遠い。公共交通専用レーンやトランジットモールも実現が見えない。

3. 都市機能を考える

人が集まるためには車道と駐車場の充実が不可欠という主張は少なくないが、重大な視点の欠如がある。車道や駐車場があるから人が集まるのではない。ほしいもの、必要なものがあるから人が来るのである。ほしいもの、必要なものとは、「都市機能」ととらえられる。

交通インフラも都市機能であるが、同時に、必要な「移動手段」と考えるべきで、これだけでは、人は集まらない。「都市機能」とは、たとえば、以下のようなものがあげられる。

- ・住居
- ・商業地域
- ・学校など
- ・病院など
- ・文化施設
- ・スポーツ施設
- ・役所等
- ・景観
- ・観光施設
- ・公共の場：公園、広場
- ・神社仏閣
- ・緑地、水辺などの自然環境
- ・安全で安心な空間

ヨーロッパ視察や松本市の現状についても、都市機能という視点を意識すれば本質が見える。公共交通は手段であり、それによる都市空間の創生、都市機能の回復、向上が本質である。

○松本市：古地図の変遷と都市機能： 城下町から近代化に向かう際に、堀を次々に埋め立てている。また、松本城の敷地の中に学校、遊園地、博物館などをつくり、人が歩くための道路を整備している。良くも悪くも、都市機能を充実させるために、使える土地を生み出そうとしてきたのである。それが、昭和20年代まで続く。様相が変わっていくのはそれ以降である。

マイカーの増加に対応して、車道の拡幅、新設、駐車場の増加が重要な都市機能を奪ってきて、多くの地方都市で直面している中心市街地の衰退につながっているのである。

○松本市：市役所建替え問題と都市機能： 松本城に隣接する中心市街地に立地する松本市役所は、老朽化等により、建て替えが議論の俎上にある。マジョリティであるマイカー利用者は、渋滞する中心部より、車に便利な郊外を支持する傾向にある。しかしながら、都市機能という視点を持てば、方向は見えてくる。役所は重要な都市機能であり、それによって多くの人たちの雇用先となり、訪問先となっている。建替えの中身を工夫することで、役所機能だけでなく、多くの都市機能を担うこともできる。(スポーツ施設、文化施設、くつろぎ空間、景観、観光、広場、緑地等々)

4. 都市のサステナビリティを考える

都市は、資源を使って、生産・消費し、廃棄物を発生させるのが一般的な流れであり、都市単独では、サステナブルではありえない。したがって、郊外、農村部、山岳部との関係を含めて、広域でサステナビリティを構築することになる。主な課題を列記すると、交通（移動手段）、エネルギー効率、廃棄物問題、緑地や自然の保護と確保、持続可能な政策、社会的包摂、技術革新、周辺地域との協力等々が上げられる。重要な2点を以下、言及する。

・廃棄物問題： もっとも本質的な問題である。最終的には廃棄物をゼロにする必要があり、すべての廃棄物は資源とみるという発想の転換が必要である。たとえば、有機物を焼却してはいけない。土に返して農作物や森林の育成につなげることで、持続可能となる。したがって、都市単独では不可能であり、周辺地域との連携が不可欠となる。

・交通問題： 公共交通と自転車や徒歩が主体となるのは言うまでもない。ただし、公共交通といえども、構築に資源が使われ、運行においてもエネルギーが使われる。人を運ぶ公共交通だけでなく、モノの移動につかわれる運送も含めて、再生可能な資源やエネルギーに完全に転換することが必要であり、それがサステナブルな都市の実現に資することになる。

おわりに

多くの自治体がめざすコンパクトシティの成否は、限られた都市空間の配分が鍵を握る。都市機能という視点を持てば、交通インフラの方向性も説得力を持ってくると考える。